

## 自己と他者

牧師 山本 護



集会所脇に生えていたミズヒキを数本花瓶に活けました。ミズヒキの種子がくっついたのか、と腕の赤い一点に触れると、あっ血だ。すると猛烈に痒くなり、どうやら蚊に刺されたようです。ポリポリ掻きながら一句。「水引の実と見間違い蚊の痕を」。子規先生の言いつけ通り写生してみました、ただのスケッチになりました。

秋いくらか涼しくなると雌の蚊の狂気が煩わしい。自らが生き延びるためではなく、未来のために死を賭して突進して来ます。蚊が血を吸うくらい何でも無い量なのに、なぜこれほど不快になるのでしょうか。この痒さは感染症から身を守るために、遠い祖先が獲得した生体反応だと言われています。

かつて読んで感銘を受けた『免疫の意味論(多田富雄 青土社)』。免疫の仕組みを説明しながら「自己とは何か、非自己とは何か」という問いを投げかけられました。外からの抗原物質を非自己として攻撃する免疫機能が、自らに向かう自己免疫疾患。また感染症を媒介する蚊を「痒さの不快」で防御するにしても、その痒さが尋常でなく掻きむしって自らの肌を傷つけてしまうことも、免疫疾患と関係あるのでしょうか。

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだから(ガラテヤ 3:28)」。「あなたがた」だけに限りません。イエスは「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる(ヨハネ 10:16)」と語りました。だから世界はキリストによる「一つの自己」ではないですか。ところが2024年の世界は自己免疫疾患に陥っているように思えます。非自己だけでなく自己までをも破滅させてしまうほど、国家や民族が過剰な生体反応を起こしています。

「水引の実と見間違い蚊の痕を」。そのままミズヒキの種子ならば雅趣があり、蚊に刺されたとしても掻いているうちに忘れます。自己と非自己が節度よく分けられているからでしょうか。その一方で、この節度は冷やかだ、と直観します。「自己の中の非自己」が痛い目に遭う自己免疫疾患。もしかするとこれは疾患ではなくて、他者(非自己)の痛みを我がものとされるキリストの響きかもしれません。あの時受け取った多田富雄の問いに、私の範囲で答えられそうな気がしています。Ω